

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第七主日(7/11)礼拝

「イエスを信じて生きる」

ルカ福音書第22章63節から第22章71節

【聖書】

ルカによる福音書22:63 さて、見張りをしていた者たちは、イエスを侮辱したり殴ったりした。64 そして目隠しをして、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ」と尋ねた。65 そのほか、さまざまなことを言ってイエスをののしった。

66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、67 「お前がメシアなら、そうだと
言うがよい」と言った。イエスは言われた。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。68 わたしが尋ねても、決して答えないだろう。69 しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」70 そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わたしがそうだと
は、あなたたちが言っている。」71 人々は、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言った。

1 私たちを明らかにする光

ここしばらく、私たちは、礼拝で主イエスの受難物語に耳を傾けてきています。主は、逮捕される時、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たち、主ご自身を捕らえて殺そうとするユダヤ当局者達に対して、「今は、あなたがたの時で闇が力を振るっている」と仰いました。人の心の中にある闇が、イエス様を捕え命を絶とうとしている、それがはっきり判るのは、主イエスが闇の力に捉えられてはおられない、闇の力からは自由な光の存在であるからです。

人が人である以上、心に暗い闇を持たない人がいるのでしょうか。また、罪過ちを犯さずに生きることができる人がいるのでしょうか。いないのだと思います。みな何がしかの罪を犯し、人を傷つけ、人に傷つけられ、人には見せられない闇を抱えて生きている。ですが、私たちは、その闇から、罪から目を反らして生きてしまいます。そうしないと安心して生きてはいけないから。ですが、そんな事が続けば、やがて自分の闇や罪を忘れてしまう。闇に囚われてしまうのです。その時、私たちは自分を完全に見失っており、どう生きればよいかも見失っているのでしょう。

ですが、皆さん、こんなコマーシャルを見た事がある人もいます。

一見、シミも何もない美しい素肌の女性。しかし、特殊な光線をあてると、皮膚の深い所に隠れていたシミが浮き上がる、こんなに沢山ある隠れシミの為にこのクリームをどうぞ。根本からシミを絶ちます、と言う CM。私達の闇も罪もこれと同じ。主イエスという光が当てられて初めて、私たちが抱えている闇や罪、自分でも気づかない自分の姿がはっきりと照らし出される、隠れているシミが明らかにされる。その様子が今日の聖書テキストにも描かれています。

2 メシア、人の子、神の子

今日の聖書テキストは、主イエスが暴行を受けた後、ユダヤ当局者から裁かれる場面です。主の受難物語の中でも誰もが思い浮かべる有名な場面ではありません。どちらかと言うと忘れられがちなエピソードです。ですが、この場面、ルカ福音書の中でも珍しい箇所であり、重要な箇所だと言われています。ルカ福音書を通じて、主イエスは幾つかの呼び名で呼ばれているのですが、その呼び名が同時に出来来るからです。ここで、主イエスやユダヤ当局者の言葉を通じて、「イエスとは何者なのか？」が三つの言葉で語られているのです。67節「お前がメシアなら、そうだとするがよい」の「メシア」。69節「しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」の「人の子」。70節「では、お前は神の子か」の「神の子」。の三つがそれです。まさに、主イエスがどのような方であるかが、最高法院の裁判の席で明らかになっています。

「メシア」と言うのは、ヘブライ語であり、ギリシャ語で言えば「キリスト」です。もともとは、神から選ばれ油注がれた王と言う意味があります。つまり、メシア、キリストとは、神の支配を打ち建て、完全なる神の国をもたらす<王>を言います。イエスを殺したかったユダヤ当局者達が、この裁判で、イエスに言わせたかった称号がメシアです。だから、真つ先に「お前がメシアなら、そうだとするがよい」と言いました。何故なら、ローマに植民地支配されているユダヤの支配者達、かなりの自治は認められていたようですが、人を死刑にする権限はありません。ローマ帝国に「イエスは謀反人だ」と訴え出なければなりません。その為には、主イエスに「私こそはメシア、神の国を打ち建てる者」と言わせたかったのです。そうすれば、ローマ皇帝への反逆を企てた謀反人としてイエスを訴え出て、ローマ帝国によって十字架につけることができるから。

次の「人の子」は、この世の終わりの時に、神のもとからやって来る審き主をさしている事が多いようです。ダニエル書7章、預言者ダニエルが見た

終わりの日の幻からきていると言われていました。「夜の幻をなお見ていると、見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み、／權威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え、彼の支配はとこしえに続き、その統治は滅びることがない。」ここの「日の老いたる者」というのが、天地万物を造られた全知全能の神、「人の子」は、終わりの日に、御神から委ねられて新しい天地を統治する者を示しています。

そして、「神の子」。私たちは、この後、K.O 兄の入会式を持ちます。その際、いつもの使徒信条とは異なる〈ニケア信条〉というものを使って信仰告白します。このニケア信条は、三位一体なる神への信仰を告白した信仰告白です。特にイエス・キリストのことを詳しく述べているものです。そこに、こうあります。

「^{しゅ}主は^{かみ}神の^み御子、^{おん}御ひとり^ご子であって、
^よ世々に^{さきだ}先立って^う父から^{ひかり}生まれ、^{ひかり}光からの^{ひかり}光、
^{かみ}まことの^{かみ}神からの^{かみ}まことの^{かみ}神、
^{つく}造られたのではなくて^う生まれ、
^{ちち}父と^{どうしつ}同質であって、
すべてのものは^{しゅ}主によって^{つく}造られました。」

神の子とは、神から生まれた者、被造物である私どもとは決定的に異なる、父なる神と全く同質のお方。それが「神の子」の意味する処です。

イエスは、メシア、つまりキリストであり、終わりの日にやってきて人々を裁く人の子である。何故なら、神から生まれた独り子だから。メシア（キリスト）、人の子、神の子。みな、天の御神と共に、王としてこの世界を審き治める方を指す言葉です。神の御支配は、何よりも正しい審きに基づくからです。だから、神の支配のもとに生きるとは、神の審きに従って生きるということ。そのように生きているかを、きちんと見ている方がおられる、正しく審く方の眼差しが私たちに注がれている、その事をきちんと受け止めて生きる、と言ってもよいかもしれませぬ。

しかし、この事は、結局は、私どもがイエスをメシア（キリスト）、神の子と信じているだろうか？という事に行きつきます。私たちは、イエスを自分の救い主、自分の王として信じて生きているでしょうか。このイエスと呼ばれたナザレ出身の一人の男を、単なる昔の人、遠い国の人ではなく、自分にとって王であり、支配者であり、神であるとして受け入れているのでしょうか。主の言葉を、自分を支配する王の言葉として、守るべき言葉として聴

いているのでしょうか？私たち、主イエスを真の審き主とどれだけ弁えているのでしょうか。私たちはイエスを信じて生きているのでしょうか。

3 主を裁く者

イエスを信じて生きているか？私たちが思っている以上にそれは重要で決定的なことです。冒頭にも申しましたが私たちの不信仰は、私たちに、主イエスを見失わせるからです。主イエスを見失うという事は、自分の真実の姿を照らし出す光を失い、自分自身を見失ってしまう、自分が儂い被造物である事を忘れ、自分の中に闇がある事、罪がある事を忘れ、自らを神のような者としてしまう事になるのです。そして、自分の闇を深くし、大きな闇の中に迷い込み、主イエス、キリストを嘲り、裁く者にさえなります。今日の聖書テキストに出て来る者達はそのよい例です。

見張りをしていた者達、大祭司の手下でしょうか。日頃の鬱憤を憐れな囚人相手に晴らしているようです。私たち人間が抱える深い闇が顕わになっています。最近の日本の政治家には、第二次世界大戦の戦前、戦中に日本人が行った残虐行為を「自虐史観」という言葉で否定し、「美しい日本民族がそんな事をする筈がない」と主張する者達もいます。しかし、どの民族もそうですが、戦争や災害など混乱した場面で信じられないような残虐性を発揮することがあります。それは、どの国の歴史にも見られるものです。そうさせるのは、無知と差別意識。「こいつらと自分達は違う。自分達の方が遥かに強くて優秀だ。こいつらには何をしてもいいんだ。」そういう無知と差別意識が、人を残虐行為へと走らせます。日頃の鬱憤晴らしの事もあれば、極限状態の不安を紛らわす為に、信じられないような残虐行為に走る。世界中の国の歴史にみられるものであり、日本人とて決して例外ではありません。洗礼を受けたキリスト者だからと言って例外でもありません。テロとの戦いで、キリスト教国のアメリカ軍兵士は、捕虜になったイラクの兵士、恐らくイスラム教徒の兵士を虐待した事件がありました。まさにここで主イエスを見張っていた者達のように、洗礼を受けているであろうキリスト教国の兵士達が捕虜達をいたぶり、裸にして高圧放水を浴びせかけた。酷い話。しかし、私たちだって、状況によってはどうなるかは分からない。深い闇が私たち人間にはあります。ここで主イエスを虐待する者達と私たちの間に、大きな差はないのだと思います。

そして、最高法院の祭司長、長老、律法学者達議員、主イエスを罪に陥れようと、偽りの言葉で主を裁きます。この審きによって、彼らは神の子を殺す事になるのも知らずに。考えてみれば、私たちも、毎日人を裁いています。

日常会話であっても人々を断罪する事があります。誰誰はこうだ、ああだ、と。自分から積極的に言わなくても、よくない噂には喜んで耳を傾けます。そうして、せっせと毎日、裁判官の務めに励んでいる。しかし、私たちの審きは、果たしていつも正しい裁きでしょうか。その裁きが正しいかどうかは、何よりも係わる人たちの言葉をよく聴いているかに現れてくるでしょう。私たち、胸に手をあてて考えねばなりません。人を裁くという事は、しばしば、その人に対して正確な判断を下すというよりも、その人を裁くことを通じて、自分の正しさを主張しようとするだけの事が多いのです。自分の義を立てる、その為に人を不義だと審く。だから、私たちは、自分の正しさを証明する言葉には耳を傾けても、自分の正しさをひっくり返し、相手の正しさを明らかにするような言葉に耳を傾けたくないのです。主イエスを裁いている祭司長、長老たち、律法学者がそうでした。主イエスは仰っているとおりです。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう。」と。彼らは主イエスの言葉に耳を傾けようとはせず、主の言葉を受け入れようとはせず、主イエスに答えようとはしませんでした。人が他の人の言葉を聞かなくなれば、神の言葉も聞かなくなります。そうして、ますます自分の中の闇に迷いこみ、自分が神となり、自分自身を見失います。

4 私達の為に祈る<人の子><メシア><神の子>

ですが、主イエスは仰います。「しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」ここで主は宣言なさいました。自分は人の子として神の右の審きの座に立つ時が来る。その時、あなたがたの今の言葉と行いが、どんなに偽りに満ちたものであるかが明かになる。あなた方の言葉と行いを私が審く時が来るその時、あなた方の真実の姿が明るみに出され、裁かれる、と。この主の言葉を、次のように取り次いだ牧師がいます。「十字架について死に三日目に甦らされたイエスを、終わりの日にやって来る<人の子>と仰ぐという事は、即ち、イエスを信じるという事は、自分の全ての言葉と行いが、このお方によって裁かれる時が来る、主の審きの席に、私の言葉と行いは耐えうるだろうか、そういう問いを忘れずに生きるという事ではないか」と。私もそう思います。イエスを信じて生きるという事の重要な一面は、終わりの日の<人の子の審き>を覚えて生きる事なのでしょう。

しかし、誰が終わりの日の人の子の審きに耐えうるのでしょうか。私たちは欠けある人間です。神に滅ぼされるしかないではありませんか。どうせ終わりの日に神に滅ぼされて生きるのであれば、今、キリストを信じて生きる意

味などないではないか？と思います。

しかし、終わりの日に審き主として来られる<人の子>は、今まさに、私達を導く<メシア、キリスト>でもあります。このお方は、私たちが救い主、メシアと仰ぐ方は、人間の王様とは全く異なります。主は、人々から「お前は我々とは違う、劣った人間だ」と差別され愚弄されても、人々を愚弄や差別をされる事はありません。主イエスは、神の子、神と等しいお方ながら全く人間と同じ者となられ、この地上で生きていく苦しみや痛みを共にしてくださいました。ご自身を暴力で貶める者達を、「私とあなた達は違う」とは決して言われなかった。言う資格のある唯一の方なのに。そして、人々から裁かれ有罪判決をでっちあげられても、彼らの為に祈ることを忘れないお方でした。真に裁くことができるお方が、裁きの座に着かれた。そして、ご自身を裁く者、殺す者の為に父なる神に執り成しの祈りをしてくださいました。

このように<メシア、キリスト><神の子><人の子>である主イエスの受難物語を見てきますと、そこを貫く一つの祈りが聞こえてきます。主イエスがまさに十字架につけられている時に祈ったとされる祈り、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分達が何をやっているのか知らないのです」。彼らは、光である私を見失ったから、自分達が何者であるかも、何をしているかもわからない闇の中を彷徨っているのです、彼らを赦してください、私は彼らの為に十字架につきます。だから、彼らが私を受け入れたら、どうか彼らに私の霊を注いでください。そうして、彼らの内に光を与え、その行く道を照らしてください、そう主イエスは、ご自身を虐待する者、ご自身を殺す者の為に祈られたお方でした、そうして、今も私たちの為に、祈っておられるお方です。主イエスは、私達を諦めない、私達が自分を諦めても主は私達を諦めない。その愛において、キリスト、救い主。

5 聖霊が注がれた者達

その十字架に架かり三日目に甦られたイエスを自分のメシア、キリストと受け入れると告白した者に、聖霊が注がれる、見えないキリスト・イエスが聖霊として私達の内注されると教会では信じられています。私達は、自分に注がれたこの光の中の光である方に照らし出されて、真実の自分を知るのです。神の独り子の尊い犠牲によって罪赦された者、罪ある被造物にも拘わらず罪清められ、天の御神を<アッバ、父よ>と呼ぶ神の御子の霊が与えられた者であると気づかされる。終わりの日のメシアの審きを覚えつつも、希望をもって生きる事ができる者と既にされているのだ、と気づかされるのです。自分に希望を持つのではなくて、私達に与えられた神の御子の霊に希望

をおける者と、メシアであり神の御子である方が私達を変えてくださったのです。それは、希望です。既に完全なる神の子にされているわけではありません。主イエスも神の御子でありながら、人間となってくださいましたが、霊なる御神、聖霊は、私達人間が無視して殺してしまえる程に弱く小さくなってくださったから。私達がこの聖霊の思いに生きるには、練習が必要なのです。ですが、この練習は失望には終わらない。主イエス、神の御子が与えてくださるこの希望は失望には終わりません。私達は、この事を確認する為に、毎週、甦りの主イエスのもとへと集められて、父なる神を礼拝します。礼拝の中で聖霊の力によって、新しいイエス・キリストに気づかされ、新しいキリストと出会い、新しい自分と出会い続ける、イエスを信じて生きるとは、父なる神を礼拝し続け成長し続ける事ではないでしょうか。

先程も申し上げましたが、**K.O** 兄が、今日、私たち横浜ナザレン教会の一員となります。教会は、父なる御神を礼拝しつつ、与えられた御子の霊を通じて、父なる神との関係を深め強め、仲間同士お互いに大切に思い合い生きる場所、そうする事で、永遠の命を共に育み合う場所。イエスを信じて生き神の愛を証する者と成長する場所。このような横浜ナザレン教会に、新しい仲間が与えられることを心から喜び、**O** 兄と共にイエスを信じて生きていきたい、そう心から祈り、神を賛美します。